SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

大学生のソーシャルサポートと社会的スキルに関する研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺, 弥生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008489

静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）第45号（1995.3）　241～254

大学生のソーシャルサポートと社会的スキルに関する研究

A Study of Social Support and Social Skills in the University Students

渡 辺 弥 生
Yayoi WATANABE

（平成6年10月11日受理）

ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate the present social supports (amounts and satisfaction) in the university students and the effects of social skills on the social support. Subjects were 84 students (29 males and 55 females). Major findings were as follows: (1) Four factors were obtained and were named as follows: support from an emotional factor, problem-solving oriented support, fun/relaxation support, and instrumental support. (2) They received problem-solving oriented support from their sibilings, acquaintances, teachers, fun/relaxation support from their friends, and instrumental support from their parents. (3) Support from an emotional factor was essentaial in male students, but problem-solving oriented support was essential in female students. (4) Students with more social skills had more social support and satisfaction than ones with less social skills.

Key words: social supoort, support from an emotional factor, problem-oriented suport, fun/relaxation support, instrumental support, social skills, students

問　　題

近年、生活に伴う様々なストレスによって、身体的ならびに精神的健康を崩している人々が少なくない。そのため、ストレスに関する研究も、臨床心理学、教育心理学、社会心理学など広い研究分野で取り上げられつつある。

中学生を対象とした研究においても、学校にまつわるストレスとして、様々なものがあげられているが、特に、学業に関わるストレスや友人関係に関わるストレスが抑鬱、不安、無力感などと関連していることが報告されている（岡安・嶋田・丹羽・森・矢富、1992）。しかし、ストレッサーが多々あることは明らかにされても、ストレスの大きさがそのまま不適応行動を規定しているとは考えがたい。すなわち、ストレスが大きくとも頑張り通すものもいれば、些細

なことで挫折してしまうものもいることを考えると、同じストレスでも個人的要因によって反応が異なることが予測される。したがって、ストレッサーそれ自体ではなく、不適応反応との間に介在し、ストレスの影響力を左右するような個人的要因について検討することがまず必要であると考えられる。そこで、本研究では、ストレスとストレス反応に介在する個人的仲介変数として、ストレスを弱める働きがすでに認められているソーシャルサポートと社会的スキルを取り上げてその関係を検討することを目的とした。

ソーシャルサポートは、他者からの社会的支援に関する認知であり、メンタルヘルスに果たす役割が大きく、特にストレスを弱める働きがあることから、近年、社会心理学、発達心理学、教育心理学で注目されている。これは、Cobb(1976)によれば、「社会的ネットワークにおける他者から愛され、尊敬され、価値あるものとみなされ、コミュニケーションのネットワークの中の一員であると信じさせてくれる、'情報'」であると定義されている。ソーシャルサポートの定義に関しては他にもいくつかなされているが、概括すれば他者から受けている援助に関する認知ということになろう。

ソーシャルサポートの効果には、主要効果と緩衝効果の2つがあるといわれ(Cohen & Wills,1985)、前者はソーシャルサポートがストレスの大きさに関わらずに適応と直接的な関係をもつ効果であり、後者はストレスが大きいほどソーシャルサポートが有効に働くという効果である。Rutter (1979) はストレスの大きい状況にある10歳の子ども(片親が精神的な病気で治療を受けている子どもや、両親が不仲な子ども)を対象にし、少なくとも片親からのサポートが強ければ、サポートのない子どもよりも問題が少ないことを報告し、緩衝効果が見られることを報告している。わが国では、岡安・嶋田・坂野 (1993) が、学校ストレスを軽減する要因の一つとして、ソーシャルサポートに着目し、サポートの期待を取り上げ検討している。その結果、中学生の女子生徒に関しては、サポートへの期待を高くもてることが、大きなストレッサーに直面したときに危機的状態に陥るのを防ぐ働きをしていることを報告している。また、荒居 (1992) は、教師からのサポートを高く認知している子どもはストレスが大きくても学校不適応が低い結果を報告しており、教師の役割の大きさを指摘している。

ソーシャルサポートの機能的内容については研究によって一致しておらず、和田 (1992) は、大学生を対象にして情緒的サポート、所属的サポート、情報的サポート、評価的サポート、道具的サポートの5つをあげているのに対して、嶋 (1991) は、心理的サポート、娯楽関連的サポート、道具手段的サポート、問題解決志向的サポートの4つをあげている。また、森・堀野 (1992) は小学生を対象に、情緒的サポート、情報的サポート、実際的サポートの3つを報告している。さらに、こうしたソーシャルサポートがどのようなサポート源(家族、仲間、教師など)からのものであるかという点についての報告もなされている(嶋、1991;森・堀野、1992)。森・堀野 (1992) は、小学校4年生と6年生を対象にその関係を検討しているが、情緒的サポートが友人から、情報的サポートが母親から、実際的サポートが友人からそれぞれ多く受けていることを明らかにしている。

大学生対象の研究では、和田 (1992) が友人のサポートして、情緒的因子と道具的因子、両親のサポートとして情緒的因子、気楽さ因子、道具的因子を報告している。また、嶋 (1991) は、父親、母親、きょうだい、同性の親友、友人、先生など最初から12のサポート源を想定し、4つの下位サポートの量の差を検討し、以下のことを明らかにしている。すなわち、家族成員が道具的サポートに関しては比較的重要度が高いが、それ以外のサポートについては母親を除

くとあまり重要度が高くないこと、同性の親友と恋人がサポート源として大きいこと、先生はサポート源として地位が低いことなどである。こうした研究報告から、家族と友人は、異なるサポート源としてそれぞれ重要であることが明らかにされたといえる。

ただし、従来の研究においては、ソーシャルサポートに関して量的なもののみが測定されており、満足度という点については明確にされていなかったことが指摘される。すなわち、サポートの量が多ければ多いほど満足がいくというものではなく、多すぎても不快な場合もありうることが考えられる。和田は、その点について指摘し、現実レベルと理想レベルの2つを測定してその差を検討しているが、サポートの量が理想を上回っても不快感が示されなかったと報告している。しかし、直接、現状の満足度に関する回答を求めた方がより明らかに成るものと考えられる。また、どのような種類のサポートを誰から受けているときに、サポートとしての満足感がもたれるのかという点についても明らかにしていくことが必要である。したがって、本研究ではこれまで扱われていなかった満足度を含めてソーシャルサポートの実態について検討することを目的とする。

つぎに、ソーシャルサポートと並んで重要な子どものストレスへの対処変数、資源変数の一つとして社会的スキルを取り上げた。社会的スキルの研究は1970年代に関心が高まり、心理学のみならず社会学や精神医学、犯罪学などでも取り上げられている。心理学においては、仲間関係の成立、維持や学校適応、さらに社会適応に重要な影響を及ぼすものとして考えられており、精神的問題や不適応問題をもつ人、及び精神遅滞児を対象とした治療的な研究がなされている。社会的スキルのとらえ方、すなわち、定義については一様ではないが本研究では「対人関係を円滑にする技能であり、相手から肯定的な反応を受けとり、否定的な反応を避けることを可能にする能力」(菊池、1988) としてとらえることとする。

子どもを対象とした社会的スキルとストレスに関する研究には、Dubow & Tisak (1989) があるが、ソーシャルサポートが高く、スキルが高ければストレスは緩和され、問題行動の発生が抑えられることを報告している。また、Dubow, Tisak, Gausey, Hryshko & Reid (1991) は、子どもの経験するストレス事態やソーシャルサポート、さらに社会的スキルが生活への適応と関係しているかどうかを縦断的研究によって検討し、社会的スキルが学業のみならず、社会的適応に有効であることを報告している。

このように、ソーシャルサポートならびに社会的スキルは、それぞれストレスを緩和する要因として取り上げられているが、その2つの関係についてはこれまで、明らかにされていない。しかし、2つの変数は互いに関係が深く、社会的スキルが高いものはスキルの低いものよりも、困ったときにその問題を解決するのに有効なサポートをうまく得ることが、できるのではないかと予測される。これに対し、社会的スキルの低いものは対人関係がうまくいかないことから、何か困ったことがあっても、サポートを求めたり、うまくサポートを得ることができないために、サポート量及び満足度が低いのではないかと考えられる。

したがって、本研究では、大学生を対象にして、ソーシャルサポートの実態（サポートの種類、量、満足度、サポート源）を明らかにするとともに、社会的スキルの高低との関係を明らかにすることを目的とする。

方　　法

被験者：国立S大学2年生から4年生84人（男29人、女55人）

期　日：平成5年9月から11月。

調査用紙：(1)ソーシャルサポート調査―和田（1992）、嶋（1991）、森・堀野（1992）を参考にして作成した。研究者によって因子のネーミングは異なるものの、使用された項目については類似したものが多いことから、因子名にかかわらずに、先行研究の項目をすべて照らし合わせ、そのうえで重複する項目、同じような表現のものを一つにして全体を集約した。また、森・堀野が小学生対象であったために、大学生にふさわしい表記に修正した。Table 1には最終的に分析の対象に用いた項目28項目が示されている。質問項目は、まずサポート量について回答させるもので、「たくさんいる」「少しいる」「ほとんどいない」「全然いない」の4件法が用いられた。つぎに、サポート源（サポートを与えてくれる人）として最もよく該当する人物を一人だけ選別し、その人物との関係をできるだけ詳しく記入するよう求めた。その際、サポート量について「全然いない」と回答していたものについては、サポート源は記入する必要のないことを教示した。また、「ほとんどいない」と回答したものについては思いつく人がいれば記入するように求めた。さらに、今現在のサポートの状況に関する満足度についての評定も求めた。評定方法は、「大変満足している」「ほぼ満足している」「あまり満足していない」「全然満足していない」の4件法を用いた。

(2)社会的スキル調査―菊池（1989）の社会的スキル尺度18項目を用いた（Table 8）。この尺度は、Goldstein, Sprafkin, Gershaw, & Klein（1986）の社会的スキル尺度の50項目から構成されたものである。これは、初歩的なスキル(発話、会話の継続や自己紹介)、高度のスキル（参加、支持、謝罪)、感情処理のスキル（感情表現、他人の怒りの処理、恐れの処理)、攻撃に代わるスキル(他人の援助、和解、他人とのトラブルの処理)、ストレスを処理するスキル(矛盾したメッセージを処理する、非難の処理、集団圧力への対応)、計画のスキル(行動決定、問題の発見、目標設定）の6つの下位スキルそれぞれ3項目ずつから構成されている。なお、回答方法としては「いつもそうだ」「たいていそうだ」「どちらともいえない」「たいていそうでない」「いつもそうでない」の5件法を用いた。また、本尺度は矢田部・ギルフォード性格検査等との関係がすでに検討されており、妥当性をもつ尺度であることが明らかにされている。

結　　果

1．ソーシャルサポートの因子構造

ソーシャルサポートの調査項目39項目について、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量が、40以上のもので1つの因子に高く負荷している項目のみを対象とした。その結果、11項目が削除され28項目となった。Table 1に因子負荷量、寄与率、信頼性係数（α）を示したが、結果として4つの因子を抽出した。因子はそれぞれ第1因子を「情緒的サポート因子」、第2因子を「問題解決志向的サポート因子」、第3因子を「娯楽関連的サポート因子」、第4因子を「道具的サポート因子」と命名した。信頼性係数は、全体及び各因子においてもそれぞれ高く、内的整合性については問題がないと判断された。各因子の内容を見ると、情緒的サポート因子は、信頼を基盤とした関係に関わる項目が中心で、特に心理的に不安な状

Table 1 ソーシャルサポートの因子分析結果

因子名	項目番号	質問項目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	共通性
	29	いらいらしたり不安になっているときに、心を落ちつけてくれる人がいますか。	.772	.315	.032	.069	.734
情	24	あなたの気持ちをよく分ってくれる人がいますか。	.712	.311	.046	.226	.732
	25	好きな人（恋愛）のことでアドバイスをしてくれる人がいますか。	.677	.119	.269	.099	.677
	37	けんかをしたりいじめられているときに助けてくれる人がいますか。	.602	.110	.247	.253	.662
緒	27	あなたの気分がよくなることやあなたが幸せになるようなこと、またあなたにとって重要なことを教えてくれる人がいますか。	.576	.258	.260	.139	.600
	39	決心がつかないときにアドバイスをしてくれる人がいますか。	.525	.342	.324	.287	.668
的	17	悲しいことがあったとき一緒に悲しんでくれる人がいますか。	.480	.370	.274	.292	.757
	38	何かをなくしたときに一緒に探してくれる人がいますか。	.464	-.044	.325	.161	.795
	1	嬉しいことがあって喜んでいるとき一緒に喜んでくれる人がいますか。	.416	.006	.308	.392	.684
	34	ひとりぼっちだなあと思うときに、一緒にいてくれる人がいますか。	.411	.352	.106	.159	.773
	15	何か新しいことを学びたいときに教えてくれる人がいますか。	-.106	.762	-.122	.167	.641
問	18	どこかに行きたいときに連れて行ってくれる人がいますか。	.268	.559	.181	.204	.591
題	10	勉強がわからないときに教えてくれる人がいますか。	.098	.554	.295	.065	.717
解	31	新しいゲーム等で遊びたいときに一緒に遊んでくれる人がいますか。	.347	.505	.233	.116	.651
決	32	落ち込んでいたり元気のないことに気付いてくれる人がいますか。	.293	.489	.164	.252	.559
志	28	何もすることがないときに、時間をどう過ごしたら良いか、アドバイスをしてくれる人がいますか。	.185	.477	.101	-.057	.615
向	30	あなたを特別に可愛がってくれる人がいますか。	.131	.461	.278	.374	.640
	12	一緒にいて楽しい時間を過ごせる人がいますか。	.121	.273	.643	.312	.783
娯	13	あなたにいい考えがうかんだとき、それを聞いてくれる人がいますか。	.276	.065	.624	.169	.674
楽	36	一人ではできないことを手伝ってくれる人がいますか。	.248	.102	.619	.004	.749
関	6	「一緒に遊ぼう」と誘ってくれる人がいますか。	.325	.073	.553	.347	.724
連	7	あなたの話を真面目に聞いてくれる人がいますか。	-.026	.332	.539	.335	.748
的	8	あなたに物（本やCDなど）を貸してくれる人がいますか。	.090	.352	.495	.147	.712
	2	けがをしたり病気になったときに世話をしてくれる人がいますか。	.064	.092	.100	.745	.706
道	4	落ち込んでいたり元気のないときに励ましてくれる人がいますか。	.328	.180	.256	.663	.736
具	21	お金が必要なときに貸してくれる人がいますか。	.383	.225	-.003	.531	.605
的	3	あなたの趣味に関心を持ってくれる人がいますか。	.008	.196	.276	.529	.467
	35	欲しいものがあるときにそれをプレゼントしてくれる人がいますか。	.296	.291	.074	.431	.725
		因子寄与率 （%）	33.7	5.6	4.9	4.4	
		α係数	.88	.78	.79	.71	.92

態にある場合のサポートを示す項目から成っていた。問題解決志向的サポート因子は、何かしたいという欲求があるときに、その欲求を満たしてくれ、その結果、方向性が与えられ、問題解決に至るようなサポート項目から成っている。また、娯楽関連的サポート因子は、気軽に遊んでくれる、時間を共有してくれるというサポート項目から成っているほか、道具的サポート因子は、病気の世話、金銭の借入、プレゼントなどを与えてくれるなどのサポート項目から成っていた。これら4つは、嶋 (1991) の研究で明らかにされた因子とほぼ対応するものであった。

2．サポート源の比較

サポート源については、満足しているサポート源の割合をサポートの種類別にTable 2に示したが、下位サポートと満足するサポート源との関係をχ 2検定によって検討したところ1％水準で有意であった($x^2=160.27, df=15$)。残差分析の結果、特に、問題解決志向的サポート、娯楽関連的サポート、道具的サポートの3つについて有意差が認められた。すなわち、問題解決志向的サポートについては、身内、知人、先生に満足している割合が高く、友人に満足していない割合が高かった。これに対し、娯楽関連的サポートに関しては、友人に満足している割合が高く、親、身内、知人に満足していない割合が高かった。また、道具的サポートについては、親に満足している割合が高いのに対して、知人や友人に満足していない割合が高かった。

Table 2 満足しているソーシャルサポートとサポート源の割合との関係

	親	身内	知人	先生	友人	恋人
情緒的ｻﾎﾟｰﾄ	40(6.57)	16(2.63)	27(4.43)	6(0.99)	483(79.31)	37(6.08)
	-1.95+	0.13	-1.33	-0.01	1.31	1.24
問題解決志向ｻﾎﾟｰﾄ	30(8.06)	17(4.57)	45(12.10)	9(2.42)	251(67.47)	20(5.38)
	-0.21	2.77**	6.44**	3.15**	-5.25**	0.19
娯楽関連的ｻﾎﾟｰﾄ	10(2.35)	1(0.27)	12(2.82)	2(0.47)	383(90.12)	17(4.00)
	-5.14**	-3.50**	-2.72**	-1.25	7.17**	-1.27
道具的ｻﾎﾟｰﾄ	63(20.19)	10(3.21)	9(2.88)	0(0.00)	215(68.91)	15(4.81)
	8.39**	0.80	-2.18*	-1.95+	-4.03**	-0.33

上段：数値は度数、（ ）内は割合（％） ** p<.01 * p<.05 + p<.10

下段：残差分析の結果

3．ソーシャルサポート量及び満足度における性差について

問題解決志向的サポート及び道具的サポート以外の、すべてのサポートに性差が認められた。Table 3に結果が示されるとおり、サポート全体、情緒的サポートに有意差、娯楽関連的サポー

トについて傾向差が認められ、女性が男性よりも多くのサポートを受けていることが明らかとなった。他方、ソーシャルサポートの満足度については、すべてのサポートにおいて性差が認められなかった（Table 4）。

また、ソーシャルサポートの量と満足度との関係を明らかにするために、相関係数を求めたところ(Table 5)、全体及び男性、女性においてすべてに高い正の相関があることが示された。さらに、満足度を従属変数にとり、各サポートを独立変数として、重回帰分析を行ったところ、全体では、情緒的サポートと問題解決志向的サポートが満足度を規定していることが明らかになった。性別に見ると、男性では、情緒的サポートのみが、女性では問題解決志向的サポートのみが満足度を規定しており、性差が認められた（Table 6）。

Table 3 ソーシャルサポート量の性差

	男性（19）	女性（57）	F値
サポート全体	78.8 (14.5)	85.4 (8.5)	5.9 *
情緒的ｻﾎﾟｰﾄ	27.0 (5.9)	30.4 (3.8)	8.7 **
問題解決志向的ｻﾎﾟｰﾄ	18.8 (4.1)	19.8 (2.8)	1.4 n.s.
娯楽関連的ｻﾎﾟｰﾄ	19.0 (3.1)	20.2 (2.1)	3.4 +
道具的ｻﾎﾟｰﾄ	14.0 (3.3)	15.0 (2.0)	2.6 n.s.

数値は平均値、（）内は標準偏差　　**p<.01　*p<.05　+p<.10

Table 4 ソーシャルサポートの満足度の性差

	男性（12）	女性（36）	F値
サポート全体	85.3 (15.8)	89.6 (12.6)	1.0 n.s.
情緒的ｻﾎﾟｰﾄ	29.3 (7.0)	32.1 (4.9)	2.2 n.s.
問題解決志向的ｻﾎﾟｰﾄ	21.3 (3.6)	21.0 (3.8)	0.4 n.s.
娯楽関連的ｻﾎﾟｰﾄ	18.8 (3.7)	20.1 (2.7)	1.8 n.s.
道具的ｻﾎﾟｰﾄ	15.9 (2.8)	16.4 (2.1)	0.5 n.s.

数値は平均値、（）内は標準偏差

Table 5 ソーシャルサポートの量と満足度の相関係数

	満足度		
	男性 (12)	女性 (36)	全体 (48)
量全体	.83 **	.78 **	.80 **
情緒的ｻﾎﾟｰﾄ	.89 **	.66 **	.74 **
問題解決志向的ｻﾎﾟｰﾄ	.63 *	.72 **	.68 **
娯楽関連的ｻﾎﾟｰﾄ	.73 **	.66 **	.69 **
道具的ｻﾎﾟｰﾄ	.66 *	.61 **	.62 **

**p<.01 *P<.05

Table 6 ソーシャルサポートの満足度の重回帰分析結果

	標準化回帰係数 (β)		
独立変数	男性 (12)	女性 (36)	全体 (48)
情緒的ｻﾎﾟｰﾄ	.81 *	.10 n.s.	.41 **
問題解決志向的ｻﾎﾟｰﾄ	-.17 n.s.	.43 **	.28 **
娯楽関連的ｻﾎﾟｰﾄ	.57 n.s.	.23 n.s.	.14
道具的ｻﾎﾟｰﾄ	-.32 n.s.	.21 n.s.	.10
R^2	82 **	.65 **	.65 **

**p<.01 *p<.05

4．社会的スキルの比較

Table 7 に社会的スキル尺度の男女別の平均値と標準偏差の結果を示した。これをもとに1要因の分散分析を行ったところ、有意な差は認められなかった。つぎに、Table 8 に示した通り、スキルの内容ごとに比較したところ、初歩的なスキルのうち、「初めて会った人に自己紹介がうまくできますか」という項目にのみ有意差が見られ、男性の方が女性よりも得点が高かった。

Table 7 男性と女性の社会的スキルの比較

	人数	平均値	SD
男性	22	59.77	11.74
女性	61	57.90	9.05

Table 8 大学生における社会的スキルの項目内容の男女比較

社会的スキルの内容	男性	女性	t値
初歩的なスキル	9.43	9.39	0.06
・他の人と話していて、話が長く続かない方ですか。	3.13	3.41	-1.07
・知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。	2.83	3.08	-0.79
・初めてあった人に自己紹介がうまくできますか。	3.48	2.90	2.17 *
高度のスキル	9.83	9.70	0.22
・他の人にやってもらいたいことを、うまく言うことができますか。	3.17	3.21	-0.15
・他人が話しをしてるところに、きがるに参加できますか。	3.22	2.98	0.94
・何か失敗したときにうまく謝ることができますか。	3.43	3.51	-0.30
感情処理のスキル	9.91	9.57	0.74
・相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。	3.26	3.05	0.90
・怖さや恐ろしさを感じたときに、自分で自分を落ち着かせることができますか。	3.61	3.34	1.11
・自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。	3.04	3.18	-0.50
攻撃に代わるスキル	9.57	9.26	0.57
・他人を助けることを、じょうずにやれますか。	3.48	3.25	1.12
・まわりの人たちとの間でけんかなどで困ったことが起きても、それをじょうずに解決することができますか。	3.04	3.21	-0.73
・気まづいことがあった相手とじょうずに仲直りができますか。	3.04	2.80	0.99
ストレスを処理するスキル	9.91	9.43	0.91
・相手から悪く言われたときにも、かっとせずうまくやり過ごすことができますか。	3.39	3.20	0.82
・あちこちからいろいろな噂が伝わってきても、まどわされずにうまく解決することができますか。	3.17	2.75	1.56
・まわりの人たちが自分とは違った考えを持っていても、うまくやっていけますか。	3.61	3.48	0.57
計画のスキル	10.96	10.54	0.76
・勉強するときに、何をどうやったら良いか自分で決められますか。	4.00	3.77	0.97
・勉強するうえで、自分のどこに問題があるのかを知ることができますか。	3.52	3.46	0.29
・勉強で目標を立てることは、あまりむずかしいことではないですか。	3.43	3.31	0.45

信頼性係数 $\alpha = .85$ *p<.05

5．社会的スキルとソーシャルサポートとの関係

社会的スキルとソーシャルサポートとの相関関係を検討したところ（Table 9）、全体ではすべてのサポートと社会的スキルとの間に高い正の相関が認められた。性別に見ると、男性では問題解決志向的サポート以外のサポートと社会的スキルとの間に正の相関関係が認められた

が、女性においては全体と同様、すべてのサポートと社会的スキルとの間に正の高い相関が認められた。

Table 9 ソーシャルサポートと社会的スキルの相関係数

	社会的スキル		
	男性 (21)	女性 (27)	全体 (48)
量全体	.58 *	.57 **	.54 **
情緒的ｻﾎﾟｰﾄ	.73 **	.59 **	.59 **
問題解決志向的ｻﾎﾟｰﾄ	.33 n. s.	.33 *	.32 *
娯楽関連的ｻﾎﾟｰﾄ	.40 +	.61 **	.50 **
道具的ｻﾎﾟｰﾄ	.52 *	.32 *	.38 **
満足度	.68 **	.52 **	.56 **

**p<.01 *p<.05 +p<.10

つぎに、社会的スキルとソーシャルサポートとの因果関係を明らかにするために、社会的スキルを独立変数として、平均値よりも高い群を高スキル群、平均値よりも低い群を低スキル群として2つに分け、高スキル群と低スキル群の間に、サポートの量及び満足度の差があるかどうかを分散分析によって検討した。その結果が、Table 10 と 11 に示されるが、ソーシャルサポートの量については問題解決志向的サポート以外は、すべて高スキル群の方が低スキル群よりもサポート量が高かった。また、ソーシャルサポートの満足度については、すべてのサポートに差が認められ、社会的スキルの高い群が低い群よりも満足していることが明らかとなった。

Table 10 ソーシャルサポートの量と社会的スキルの関係

	高スキル群 (35)	低スキル群 (40)	F値
サポート全体	87.8 (10.9)	80.2 (9.4)	10.4 **
情緒的ｻﾎﾟｰﾄ	31.4 (4.1)	28.0 (4.5)	12.0 **
問題解決志向的ｻﾎﾟｰﾄ	20.1 (3.4)	19.0 (3.0)	2.4 n.s.
娯楽関連的ｻﾎﾟｰﾄ	20.6 (2.9)	19.3 (1.8)	5.8 *
道具的ｻﾎﾟｰﾄ	15.6 (2.1)	14.0 (2.4)	9.3 **

数値は平均値、() 内は標準偏差 **p<.01 *p<.05

Table 11 ソーシャルサポートの満足度と社会的スキルの関係

	高スキル群（21）	低スキル群（27）	F値
サポート全体	95.0 (10.3)	83.5 (13.5)	10.5 **
情緒的ｻﾎﾟｰﾄ	33.7 (4.2)	29.6 (5.8)	7.6 **
問題解決志向的ｻﾎﾟｰﾄ	23.0 (2.8)	19.6 (3.7)	12.6 **
娯楽関連的ｻﾎﾟｰﾄ	20.9 (2.7)	18.9 (3.0)	5.9 *
道具的ｻﾎﾟｰﾄ	17.4 (1.9)	15.5 (2.2)	9.6 **

数値は平均値、() 内は標準偏差　　**p<.01　*p<.05

なお、社会的スキルの2群別に、ソーシャルサポートの満足度とソーシャルサポートの因果関係を明らかにするために、重回帰分析を行った。その結果、高スキル群において情緒的サポートが満足度を規定する傾向が認められたのに対して、低スキル群では問題解決志向的サポートが満足度と関連が深いことが示された（Table 12）。

Table 12 ソーシャルサポートの満足度の重回帰分析結果

独立変数	標準化回帰係数（β） 高スキル群	低スキル群
情緒的ｻﾎﾟｰﾄ	.55 +	.27 n.s
問題解決志向的ｻﾎﾟｰﾄ	.33 n.s.	.37 *
娯楽関連的ｻﾎﾟｰﾄ	-.12 n.s.	.29 n.s.
道具的ｻﾎﾟｰﾄ	.15 n.s.	.04 n.s.
R^2	.72 **	.62 **

**p<.01　*p<.05　+p<.10

考　察

大学生のソーシャルサポートとして、情緒的サポート、問題解決志向的サポート、娯楽関連的サポート、道具的サポートの4つのサポートが存在することが明らかとなった。それぞれのサポートについて満足しているサポート源の割合を見ると、サポートの種類によって異なるこ

とが明らかとなった。すなわち、様々な問題を解決する際には、知人や先生、身内に助けられる割合が高いのに対して、友人からは満足したサポートが得られていない様子が認められた。また、道具的サポートについても、友人は満足のいくサポート源ではなく、親からのサポートに満足していることが明らかとなり、大学生の生活が親による金銭を代表とした物質的援助によって支えられていることが認められた。しかし、娯楽関連的サポートについては、満足のいくサポートを友人から多く得ており、友人が時間を共有し、楽しむ相手として最も求められている存在であることが示唆された。恋人については、他のサポート源に比較して有意な差を示すほど割合いの高いサポートでなく、本研究では、大学生の生活の中では、意外にも大きなサポート源ではないことが明らかとなった。ただし、この点については、選択肢から選ばせる調査方法ではなく、自由記述形式であったために、サポート源として記入することに抵抗を感じ、友人に含めたものも少なからずいたと想像される。そのため調査方法を工夫してさらに検討する必要があるように思われる。以上、本研究結果は、和田（1992）や嶋（1991）の結果とは部分的に異なるところもあったが、家族と友人が異なる種類のサポート源としてそれぞれ重要であることについては、一致して認められたといえる。

つぎに、男女別にサポート量を見たが、全体に女性の方がサポートの量が多かった。なかでも、情緒的サポートが多かった。すなわち、女性の方が、悩んだときや落ち込んだときに心のよりどころになってくれる人や、良き理解者をとなってくれる人を男性よりも多くもっていることが示唆される。また、一緒に楽しい時間を過ごしてくれる人や遊んでくれる人などについても、男性より多くのサポートを得ている傾向が示された。ただし、満足度については、男女差がないことから、女性の方が男性よりもサポートの量が多いからといって、それだけ満足しているとは限らないことが示唆された。

ソーシャルサポートの量と満足度との関係については、全体、男女とも正の高い相関が得られていることから、サポートの量が多ければ多いほど、満足度も高くなることが認められた。因果関係については、男女差が見られ、男性は情緒的サポートが多く得られるほど、すなわち、心のよりどころとなってくれる人が存在すればするほど満足度が高くなることが明らかとなったのに対して、女性は問題解決志向的サポートの量が多いほど、満足度が高くなることが明らかとなった。

これは、必ずしもサポート量のみが満足度を規定するのではなく、どのようなサポートが特に必要なのかという点について性差があることを明らかにしたといえる。すなわち、男性は、サポートの中でも、情緒的な安定を導いてくれるサポートの存在が満足度を感じる上で重要であるのに対して、女性の場合は問題解決に導いてくれるサポートの必要性が高いことを示したと考えられる。特に、女性の場合は男性よりもすでに情緒的サポートが満たされている状況にある傾向が強く、現状よりもさらに高い目標なり、欲求に答えてくれるようなサポートを望んでいる気持ちが強いのかもしれない。これに対して、男性は問題解決的なものは、もともと自力で解決しようという傾向が女性より強いために、あえて問題解決のサポートを求めず、精神的に落ち込んだ場合に支えとなる情緒的サポートの方を求める傾向が高いのかもしれない。この点については、男性、女性のライフスタイルや対人関係のあり方についてさらに調査を重ねて考察することが求められる。

つぎに、社会的スキルについては、性差は認められなかったが、社会的スキルの高低によって、ソーシャルサポートならびに満足度が規定されている結果が示唆された。ソーシャルサポー

トの量については、問題解決志向的サポート以外はすべて、社会的スキルが高い群の方が低い群よりもサポート量が多かった。これは、社会的スキルが高い人の方が低い人よりも、生活する上でサポートへの必要度が高いというのではなく、むしろ、対人関係に関わるスキルに長けていることから、多くの人脈すなわち、サポート源を有していることが示唆される。また、人への関心が高く、生活における満足度が、対人関係の中で得られることが多いことの現れということも考えられる。したがって、ソーシャルサポートの満足度についても、すべてのサポート面においてスキルの高い群の方が高かった。これに対して、社会的スキルが低い群は、十分なサポートを得ることができず、その結果、満足度も低いものになってしまっていることがうかがわれる。また、問題解決志向的サポート量にのみが差が認められなかったが、満足度については差が認められることから、社会的スキルが低い群は社会的スキルが高い群に比べて、問題解決志向的サポートをより多く求めている傾向の高いことが考えられる。このことは、重回帰分析の結果からもうかがわれ、スキルの高い群が情緒的サポートによって満足度が得られることに対比して、スキルの低い群が、問題解決志向的サポートを多く得ることによって満足度を得ていることが示唆された。

したがって、社会的スキルが低い群では、自分が何をしてよいかわからないときや、何かを学びたいときに教えてくれるなど、ただなぐさめてくれるのではなく、さらに、指針を与えてくれる人を求めている姿がうかがわれる。これはまた、自己の不足している点を補ってくれる人を求めているともいえるかもしれない。

以上、本研究では、大学生のソーシャルサポートの実態と、それについての性差を明らかにすることができたほか、ソーシャルサポートの量や満足度が、社会的スキルの影響を受けていることについて明らかにすることができた。しかし、なぜ、サポート及び満足度について性差があるのかについての原因については十分明らかにすることができなかった。したがって、先に述べたとおり、性差が生じる原因となる背景について考えていく必要があるであろう。また、社会的スキルをどのように向上させることが、満足のいくサポートを得ることにつながるかについても発展させて考えていくことが必要であると思われる。さらには、大学生にどのようなストレスが存在し、どういったストレスの緩和に、どのようなサポートや社会的スキルが必要であるのかについても、研究を重ねていくことが望まれる。

引用文献

荒居　裕　1993　中学生の学校ストレスとソーシャルサポートに関する研究　平成3・4年度埼玉県教育委員会・大学院派遣研修報告書

Cobb, S. 1976 Social support as a mediator of life stress. *Psychosomatic Medicine*, 38, 300-314.

Cohen, S. & Wills, T. A. 1976 Social support, stress and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357.

Dubow, E. F. & Tisak, J. 1989 The relation between stressful life events and adjustment in elementary school children: the role of social support and social problem-solving skills. *Child Development*, 60, 1412-1423.

Dubow, E. F., Tisak, J., Gausey, D., Hryshko, A., & Reid, G. 1991 A two-year longitudinal

study of stressful life events, social support and social problem-solving skills : contributions to children's behavioral and academic adjustment. *Child Development*, 62, 583-599.

Goldstein, A. P., Sprafkin, R. P., Gershan, N. J., & Klein, P. 1986 The adolescent : social-skills training through structured learning. In G., Cartledge & J. F., Milburn. (eds.), *Teaching social skills to children*, Pergamon Press.

菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店

森 和代・堀野 緑 1992 児童のソーシャルサポートに関する一研究 教育心理学研究 402-410.

岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森俊夫・矢富直美 1992 中学校の学校ストレッサー評価とストレス反応との関連 心理学研究, 63, 310-318.

岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャルサポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究 41, 402-312.

Rutter, M. 1979 Protective factors in children's responses to stress and disadvantage. In M. W. Kent & J. E., Rolf (Eds.), *Primary prevention of psychopatholgy* : vol. 3. Social competence in children (pp. 49-79). London : University Press of England.

坂野雄二 1990 登校拒否・不登校 同朋舎

嶋 信宏 1991 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究 教育心理学研究 39, 440-447.

和田 実 1992 大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響 教育心理学研究 40, 386-393.

謝辞

本調査の分析及び結果の整理にあたり、ご協力いただきました静岡大学教育学研究科学校教育専攻2年生の酒井博美さんと同1年生の蒲田いずみさんには心から感謝致します。